

NPO 純正律音楽研究会会報 ～2012年11月発行～

ひびきジャーナル



〒168-0072 東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 Tel:03-5317-0291

Fax:03-5317-0289 e-mail:puremusic0804@yahoo.co.jp

No.34

発行日 平成24年11月10日
発行責任者 NPO 法人 純正律音楽研究会
編集 相坂政夫



2012年11月22日甲府セミナー

芸術の秋、皆様如何お過ごしでしょうか。早いもので、年の瀬の話もチラホラ出てきました。当会も年内コンサートは12月14日金曜日が最後となります。今回は、お箏の吉原佐知子さん、ハープの三宅美子さん、ヴァイオリンの水野佐知香が出演します。会場の都合により60名様限定となりますので、お早めにご予約下さい。年内の会報は今回で終了です。来年の予定をお知らせします。来年は1月末～2月頃、四谷にてミニコンサート、3月16日土曜日には新宿、角筈区民ホールで純正律音楽コンサートを開催する予定です。ぜひご来場下さい。

尚、年会費について重要なお知らせがあります。巻末にてご確認下さい。今後とも純正律音楽研究会をよろしく願い申し上げます。

夏から秋にかけて色々な出会い

洗足音楽大学 教授・ヴァイオリニスト
NPO 法人 純正律音楽研究会 代表
水野佐知香

すっかり秋になり、というより一気に秋を通り越して冬到来！という感じです。会員の皆様、お風邪等に負けないでお元気でいらっしゃいますか。

この夏から色々な出逢い、コンサート等がありました。7月17日には私が教えに行っている洗足学園音楽大学で、学生たちの洗足ストリングオーケストラの第一回演奏会があり、東京クァルテットの初代ファーストバイオリンで洗足学園音楽大学原田幸一郎客員教授の指揮者に、世界的ヴァイオリニストの一人、ジェラルド・プーレをソリストにお迎えして、ショーソンの詩曲、芥川也寸志と弦楽のための三章、ショスタコーヴィチのop. 110弦楽四重奏曲の弦楽合奏版等を演奏しました。若い学生たちの無限の可能性を示した素晴らしいコンサートとなり、いらっしゃっていただいたお客様はもちろん、学生たちも本番をやり遂げたとして、とても感動をしていました。皆の心が一つになった時、素晴らしい力が湧いてくる。「若い」って凄いですね。

8月は、飯綱高原に5日間長野国際音楽祭の講師として過ごしました。すばらしい空気と山々の景色、そしてお星様がきれいだったこと、レッスンで忙しい毎日でしたが、自然を満喫しながら、色々な生徒さんとの出会いは格別でした。

9月2日は、私が代表をしている弦楽合奏団「ヴィルトゥオーゾ横浜」の10周年記念と世界の名ソリスト、オレグ・クリサ氏の70歳になられた記念のコンサートを、みなとみらい小ホールでおこないました。

「おひさま」、「利家と松」等の作曲家で2011年度日本レコード大賞編曲賞をいただいた渡辺俊幸氏の心癒される新曲、また、クリサ氏とは、弦楽合奏にチェンバロ、鐘、チェレスタが入った編成のシュニトケの「コンチェルトグロッソ第3番」を演奏し、すばらしい響きのなかで感動的なコンサートができたと自負しております。

10月22日には甲府の「アドバンスクラブ」というお年寄りの生涯学習グループから、お招きをいただき「純正律音楽研究会」の活動として行ってまいりました。

80人ほどの受講者で教室も熱気でいっぱい！「純正律」の言葉を初めて聞く方達が多く、真剣にノートを片手に一生懸命受講されていました。

玉木さんが弾かれていたカラオケをバックにヴァイオリンを弾き始めると、皆さん〈うっとり〉初めての純正律の出会いに感激をされていました。後半は、大きな声で日本の歌を皆さんで歌い盛り上がり、講座終了後も平均律との違い、考え方などの質疑応答が続き、感動のなか終了いたしました。

10月末には外国人記者クラブで、一色宏先生という方の本の出版記念パーティーがあり、娘のヴァイオリニスト荒井章乃と私で、玉木さんの編曲されたデュオバイオリンの名曲を演奏してきました。皆さん、すばらしい音の広がりや厚みにびっくり！剣術をやられる方からコラボレーションしたいとお申し出がありました。

音楽には、御存知の通り、元気を貰ったり、癒されたり、昔を思い出したり、希望を持ったり、時には人生を変えたり、すごい力があります。

先日「ギドン・クレメル」の演奏会に行ってきました。この人こそ凄い、聴いている方も研ぎ澄まされるというか、グサ〜と身も心もやられてしまいました。

心の奥底からの音、音楽をヴァイオリン一本で語り、語りつくせないほどの語り口、音色、圧巻でした。やはり、玉木さんもそうでしたが、自分のやりたいことをまげずに、貫き通すことが音楽にも必要だとつくづく感じました。

まだまだ、私たちも命がこの世にある限り、精進しなければ！次に生まれ変わった時に、少しでも楽ができるかも？

ご報告があります。私、水野佐知香は2012年度、横浜文化賞をいただくことになりました。11月21日に横浜みなとみらい小ホールで授賞式と記念コンサート(不思議ですがこのコンサートには、昨年横浜文化賞・奨励賞をいただいた、私の愛弟子、高校2年生の山根一仁君がひいてくれます)があります。純正律音楽研究会からも玉木さんの奥様はじめ、来て頂く予定です。

同じく高校3年生の毛利文香さんが、今年の川崎の文化賞・奨励賞にあたる「アゼリア賞」をいただき、11月には出席しなければなりません。また結婚式もダブルであり、うれしい月になりそうです。

純正律の演奏を聴かれた方はこの響きに感動されます。いろんな機会を見つけて演奏し、玉木さんの意志を伝えたいと思います。

「純正律は世界を救う」皆様、よろしく願いいたします。

ムッシュ黒木の純正律講座 第33時限目

平均律普及の思想的背景について(22)

純正律音楽研究会理事 黒木朋興

友人の哲学／倫理学研究者に田上孝一氏がいる。もともとは初期マルクスの疎外論をやっていたが、現在では大学で倫理学の授業を担当し、倫理学の著作や論文も多く発表している。

その田上氏は、筋肉隆々の大男であり、実際に会ってみるとお相撲さんのような巨漢である。日々、ウェイトトレーニングに励み、常人では考えられないような錘を軽々と上げているという。

その氏は、ベジタリアンである。つまり極力肉は食べない。つまり植物性タンパクだけで、筋肉むきむきなのである。

彼が何故ベジタリアンになったのかと言うと、肉が嫌いだからではない。むしろ昔は大好物だったのだそう。では何故かと言えば、倫理学を始めたからだと言う。例えば、日本でも有名になったサンデル教授の専門領域が倫理学だ。

そもそも神なき社会においてまず尊重しなければならない原理に、人権がある。1人の人間の生命はおろそかにされてはいけないし、苦痛を与えることも正しくない。そのような思想を突き詰めていくと、実は人間だけではなく、生命そのものを尊重しなければならない、ということになってくる。当然、生命には動物一般も含まれる。だから、なるべく生命に苦痛を与えないように努力していかないと、論理的には人権そのものも守れなくなってしまう、というのが動物の権利論の根本思想である。(植物という生命を摂取して良いのは、植物には苦痛を感じる器官がないからと説明される。)

また肉食は環境に悪い。動物の飼育には大量の水がいるし、牛のゲップは大気汚染の原因となる。何より、動物に与える飼料を人間が食べれば、より多くの人に食を提供することが出来るので、飢餓問題の解決策にもなる。というわけで、欧米の多くの倫理学者が現在ベジタリアンという生活スタイルを採用している。

田上氏は、以上のことを勉強したので、ベジタリアンの生活が実際に出来るかどうか試してみたのだそうだ。そうしたら、出来てしまった。というわけで、まさに彼は実践型の哲学者ということになる。

彼は常日頃から「肉食は倫理的に良くない」と主張している。そして実践している。しかし、飲み会で私や他の研究者が肉を食べていても何も言わない。つまり決して自らの主張の押しつけはしないのである。かくいう私も、田上氏の論文を読み、少しは影響を受け、肉の量は以前より減っている。たが、ベジタリアンになったわけではない。そんな私に「減らす努力をするだけでも良いんだよ」と言ってくれる。

実は、田上氏に会う前は、私はベジタリアンの思想なんて愚か者の主張に過ぎない、と信じていた。ところが氏の論文を読んで、蒙を啓かれたのである。もちろん氏のような倫理学者ではないので、ベジタリアンにはなっていない。ただ、思想として納得したので、まったく無視するわけにはいかなかったというわけだ。かくいう田上氏自身も、シンガーなどの著作を勉強するまでは、ベジタリアンの思想を馬鹿にしていた、と言う。

その田上氏に対して、ネットなどで誹謗中傷が浴びされることがよくある。田上氏は優しいので、懇切丁寧に説明を試みるが、彼らは田上氏の言葉をまったく聞こうとしない。「私の論文を読んでみて下さい」と言っても、まず読まない、そして誹謗中傷を繰り返す。彼らにとって重要なのは、論理ではないのである。とにかくベジタリアンの思想はおかしいという勘と、ベジタリアンは嫌いだ、という感情論があるだけなのだ。

田上氏を罵る人を見る度に、カエサルの「人は現実のすべてが見えるわけではなく、多くの人は見たいと思う現実しか見ない」という台詞を思い出す。とにかく彼らにあるのは「動物愛護は嫌いだ」という結論だけであり、田上氏のいかなる合理的な説明も論拠も耳に届かない。

<p>連続エッセイ【外科医のうたた寝】第29話 『鍋の悲劇』</p>
--

純正律音楽研究会理事

福田六花（シンガー・ランニング・ドクター）

今年も寒い季節がやってきました。10年前に生まれ育った東京から富士山麓

の標高 850 メートルの街・河口湖に移住して以降、冬の数ヶ月は“耐え忍ぶ”と云ったフレーズがぴったりの寒さです。そうすると冬のあいだは温かいものが食べたい日々が続きます。シチュー、ラーメン、おでん、肉まん色々あるけど、やはり真打は“鍋料理”で決まりです。

もう 10 年以上前のことですが、友人が結婚してその新婚家庭の夕食に招かれたことがありました。友人の奥様はフランス料理、イタリア料理などが得意な方なのですが、クックブックのレシピを忠実に再現し、スパイス満載のものすごく凝った鍋を御馳走してくれました。「美味しいな、。」と思いつつも、もう少し鍋料理はラフなものでは？とも思いました。

僕が施設長を務めている「介護老人保健施設はまなす」には、100 名ほどの職員が働いており、そのうち 7 割ほどは女性です。多くの女性職員は主婦であり母であり、家庭と仕事の両立に頑張る姿に、僕は尊敬の念を抱いています。

ある冬のランチタイム。数人の女性職員と雑談を交わした時のこと、7 人家族の台所を仕切っている女性が、こんなフレーズを呟きました。

「冬は鍋だから楽でいいね、。」

少し突っ込んで聞いてみると、彼女は冬のあいだ連日のように同じ具材で鍋料理を作り続けているとのことであった。スーパーに行くと“鍋の素”と云うスープが売られており、「醤油味」「味噌味」「カレー味」の 3 種類でローテーションを組み、具材を切り、コンロに載せた鍋にドボドボと“鍋の素”を注ぐと準備完了だそうである。「今日は鍋だよ、。」と云うと子供が不満そうな顔をするとも言っていました。

あまり手を抜くのも考えものだなと思いつつ、仕事の忙しさが連日の「鍋の悲劇」の原因になっているのかも？と少し申し訳ない気持ちにもなってきました。

創造のふるさと未来に！

言語交流研究所
上斗米 正子

猛暑をくぐり抜けてかなっくホールに駆け込む・・・と、まもなく「玉木宏樹メモリアルコンサート」が始まった。演奏者から紡ぎ出される音は、優しく柔らかく、それでいて五感を研ぎ澄ます秩序の剣に魅き寄せられるようで、心がゆれ、会場中が、水いろ・菜の花いろ・桜いろになって、天上のひと時となった。

演奏の皆さんから響いてくる玉木宏樹さんの魂が、私たちひとりひとりに「今日は純正律音楽の世界によろこそ」「玉木純正律ファミリーどう・・・素敵だろう」

「今日からかな・・・」と語りかけてくるようだった。

このコンサートに、言語交流研究所・ヒッポファミリークラブの「キキマン」チームの岩野清子さんにお誘いをうけた。言語交流研究所は「ことばと人間」をテーマに、家族や仲間ではいろいろなことばを自然習得する多言語の環境づくりや多国間国際交流を実践して 30 年になる。研究部門トランスナショナル カレッジ オブ レックスより「フーリエの冒険」「量子力学の冒険」や「人麻呂の暗号」「額田王の暗号」新潮社刊など、ベストセラーを生み出した。古代日本は多言語世界・・・古事記や日本書紀、万葉集などを多言語で読み解く冒険は「キキマン」フィールドと称され多様に花咲いている。岩野さんもその一人で、漢書律曆志の『黄鐘の笛』に着目し、その昔（紀元前 2700 年ごろ）中国の王さま黄帝が国を治めるのに、『笛』と『曆』とつくりなさい・・・『笛』とはいわば度量衡を定める試みが開始される。「キキマン」チームはこの書にしたがい、崑崙山の麓ならぬ埼玉のヒッポメンバーの竹藪より竹を求めては、竹を九寸に切りこの長さを基に、陽の六音と陰の六音の十二音（本）で笛をつくりあげた。チームはこの笛の音階のつくり方の研究発表と笛のコンサートを実現した。このプロセスで岩野さんは音階の構成に関心を持ち、玉木宏樹さんの『純正律』に出会う。そして昨年純正律セミナーに出かけ、玉木宏樹先生に直接ご指導を受ける幸運に恵まれた。

年が明けて、玉木宏樹さんのご逝去が「キキマン」女子たちで悼まれる中、『ふるさととは未来に』の作曲は玉木宏樹さん、そして作詞は上斗米さんだって！』のメールが私にも流れてきた。私が、玉木宏樹さんのご逝去と追悼コンサートのことを知ったのはこの時だった。

禿の作曲家ムッシュウ・ポール・・・玉木宏樹さんのことを、私はこう呼ばせていただいていた。

実はわたしは、1985年に夭折の画家・有元利夫さんが 38 歳で他界されたとき、「有元さんの新しい作品に二度と会うことができない」と思うと、地球の自転が止まるような衝撃を受け、夜な夜な彼の画集を眺め続けた。有元さんとは何の面識もなく、有元芸術のファンのひとりであった。その頃たまたま研究所で多言語の環境づくりの CD・音楽シリーズで日本語の歌詞を公募していたのだが、有元芸術とロシア未来派の詩人・ヴェリミール フレーブニコフの詩の一節が融合して『ふるさととは未来に』の歌詞が生まれた。有元さんの画集を眺めながらことばが溢れてきて、「有飛行—有元利夫と仲間たち」として風濤社より

一冊の本になった。

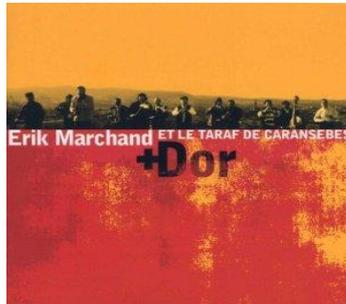
当時研究所は多言語 CD マテリアルの音楽編集やアレンジを「ビバーチェ」に託し、『ふるさとは未来に』の作曲を、「今、大人気の面白い作曲家」をお願いすると聞かされた。歌録りの日、禿の作曲家ムッシュウ・ポール氏と麻布のスタジオではからずも遭遇！挨拶を交わさせていただいた。ムッシュウの音で遊ぶ楽しいお姿と時折キラリと光る眼力は今でも忘れられない。『ふるさとは未来に』の歌は、ヒッポファミリークラブ多言語マテリアル **Sing Along! Dance Along!** に収められ、日本中は勿論、アメリカやメキシコ、韓国などでも、歌って&踊って多年代に親しまれている。

玉木宏樹メモリアルコンサートで、あの日のことが鮮烈に甦ってきた。あの一度の遭遇が永遠のお別れになるなんて・・・ムッシュウ・・・あなたが純正律で世界をひらく神さま！でしたのね・・・わたくしの本を差し上げたかった・・・言語交流研究所・ヒッポファミリークラブの皆さんに「純正律」のお話と演奏をしていただきたかった・・・榊原陽（言語交流研究所代表理事）と人間の言語音階の秩序と純正律について、語り尽くしていただきたかった・・・禿の作曲家・・・とお呼びさせていただいたのは、わたしの敬愛の念からでしたよ・・・『オンディーヌの眼覚め』の箏曲が始まると、有元利夫の女神たちが無重力空間を浮遊し始め、玉木さんと有元さんが「秩序」の世界で繋がっている・・・と。嗚呼、今こそ玉木宏樹さまにお目にかかりたかったです・・・と涙があふれた。

玉木宏樹さんが純正律ワールドの扉を開けてくださり、あれから世界が、透明に響き始めている。



CD レビュー 純正茶寮
< Dor >
純正律音楽研究会理事 黒木朋興



Dor

Erik Marchand

Label: Rca Victor Local

B000023XJ2

1998 年

フランスはブルターニュ、ロストルナンで行なわれているフェスティヴァル・フィセルを訪れた時、ジャン＝フィリップが「Erik Marchand (エリック・マルシャン) はブルターニュでとつても尊敬されている歌手＝ミュージシャンで、ブルターニュの伝統音楽を基に東欧の伝統音楽の要素を取り入れながら独自の音楽を創り出している。また優秀な音楽学者でもあるんだ」と言って、彼を紹介してくれた。「私も音楽学をやっているですよ」と言うと、「何をやっているんだい?」と聞くので、「平均律の歴史を調べています」と答えると、「平均律なんてまったく興味がないな、なんでそんなものが世界を席卷したのだろうか?」と更に聞いて来る。「まあ、平均律を使うと、すべてのキーで演奏出来たり、複雑な転調が出来たりするので、そういうのが音楽の進化だって信じられた時代があったのだし、また今でもそう信じている人がいるんですよ」と答えると、「転調なんて私の音楽ではまったく縁がない。私の音楽はモード音楽だからな」と言って微笑んだ。

玉木さんもよく「転調なしで、モードの可能性を追求する、これがオレの音楽の目指すところだ」とよく言っていた。この CD はジャン＝フィリップにももらったものだが、聴く度に玉木さんのことを思い出す。

【偶然のみちびき】

DSD編

翻訳家・きき酒師 川合 浩

昨年は私にとっての1ビットレコーディング元年。たまたま書店で見つけたアナログレコードの愉しみ方という新書を購入しパラパラ見ていたら、なんとハンディタイプでDSDにも対応しているレコーダーを発見。ほとんど感動を覚えつつ即購入。1ビットレコーディングがハンディタイプで可能になったとは、しかも個人で1ビットレコーディングができる。いやいや、可聴域を超えた音に興味を持つ拙者としてはマストアイテム。早速公式の場では、洗足音大のフュオンでギターアンサンブルを録音。学園関係者を示す腕章を着用しての録音対応。楽しく対応させていただきました。

1ビットレコーディングという言葉自体はかなり前から耳にしている、SACDが発売された時も、その新聞広告の様子はまだ目に焼き付いているし、銀座ソニービルの試聴室にも行っている。試聴中はとくにどうということ無く、こんなものかと思って退出したが、退室して1歩2歩そして3歩ほど進んだ所で、あっ、違う。脳の清涼感が違う。やはり高周波を聞いていたのだ、すくなくとも脳は感じていたのだと思ったものだ。

1ビットレコーディングという言葉は初めて聞いた時、1ビットでどう表現するのかと考え始めていて、サンプリングの差分を取っているのではと考え始めていたが、編集が困難ということなどを後で耳にし、やはり差分かと思っていた。

とはいえ、DSDのより詳しいことが知りたくて、ネットで検索しても納得できるレベルのものを発見できないでいた。ある日の検索で、5月にDSD試聴会なるものが開催されることを知った、しかも無料で。早速申し込んで、当日会場に向かうと、会場ビルの屋上に「KORG」の看板が。後で聞けばその本社跡を貸しスタジオに改装して使用しているとのこと。会には参加者3名、こぢんまりとしている。試聴室には、エルプ社のレーザーターンテーブル、クリアオーディオ社のバキュームレコードクリーナー、SONYのDSDディスクプレーヤーと、拙宅に導入済みのもあり、それを伝えると先方も驚いていた。

主役は勿論、ラックマウントタイプのDSDレコーダーとSACDプレーヤーで、CD音源との聴き比べも行われた。この日、来場者の1人はKORGの方であることが、帰り際に分かった。高音質音源やマルチチャンネルにも興味をお持ちらしかった。帰宅後、このスタジオのツイッターアカウントをフォローした。

ある日、たまたまツイッターを開いたら、このアカウントがリツイートしていて、DSD音源を聴く会が秋葉原であるという。こちらも早速申し込んで参加。ここで刺激を受けたせいか、拙宅でもマルチ再生をと。

7年前のユニバーサルプレーヤーもあるし、DVD-Audio 対応のDIGAもあるので、新たに機器を購入せずにマルチ試聴にトライすることにした。プレーヤーにはアナログ出力があるので、6チャンネル分、つまりステレオ3セット分。しまつてあるものを引っ張り出してきてとりあえずトライ。おおむね良好。

さらにネット検索していたら、オーディオ協会がホームシアター講座が開催されているとのこと、しかも無料で。早速こちらも参加。場所は築地から徒歩で、つきぢ田村の近く。そう言えば、とある日本酒蔵元の会がここであったなど思いつつ、帰宅後調べたら、なんとオーディオ協会の隣のビルは、田村の後の二次会で、主催者のオフィスに行ったことがあったのでした。しかも、当日お手伝いに来ていた蔵元の次女の方がなんと洗足音大の卒業生。隣りにいらしたから、ローカルな話題で盛り上がったのを思い出します。

その後、秋葉原でのDSD音源試聴会の案内がまたあり、行ってみると、オーディオ協会関係者もいらしていて、受付の方も「そうそうたるメンバーですよ」と。

後で分かったのだが、私の前にいらした方が、早稲田大学の山崎芳男教授。DSDに詳しい方はお分かりですよ。試聴会終了時、山崎先生が発言を求められて、当然ですが安田靖彦元教授のことにも言及されて「DSDという呼び方は止めてください、 $\Delta\Sigma$ 変調と言ってください」と強い希望が。終了後、山崎先生にかねてからの疑問と私の解釈をお話ししてみると、差分を取っているだけでなく、積分してから差分を取っていますと直々にご講義をいただきました。私にとって、これもまた貴重な出会いでした。

さてここで話ががらっと変わるが、玉木さんの古くからの飲み友の山本さん、私とは7月に会ったばかりだったが、この山本さんが玉木さんの追悼音楽鑑賞会をやるという案内をFACEBOOKで見つ、そうかと当事者意識皆無で過ごしてい

たら、なんと主催の山本さんからライブ演奏もすることになってアコギで参加しませんかとお誘いが。人前で演奏できるような腕前ではないので、オーディションがあれば絶対落ちますよといいつつも、参加の意向を伝えた。すると、ライブに自作リボンコントローラで参加する人が、KORGの技術者で私を知っているという連絡が。ということは、そう、5月のDSD試聴会でお会いした方だろうと。実際に会って、どこか音源関係で再会する可能性はあったかも知れないが、純正律関係で再会するとはと、お互いにびっくり。

先日このライブ演奏を済ませたばかりだが、玉木さんのヴァイオリン用の作品を、ほんの部分ですがギターで弾かせて貰って、5度調弦向け楽曲を4度調弦楽器で演奏する違和感を満喫させて頂きました。

はてさてヴァイオリンで弾くと、どんな感じなのだろうかと、興味津々の今日この頃である。

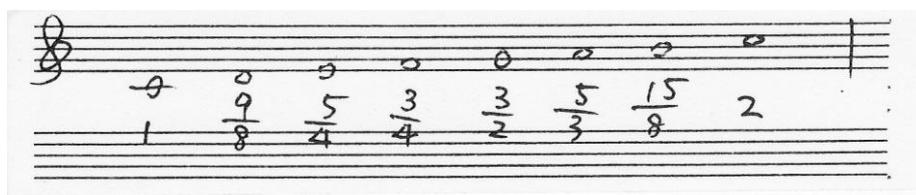
**【純正律こそが体に良い調律である】
音の後進国日本より**

玉木宏樹遺作

1. 純正律とは

太古以来人間は、純正な「ドミソ」の響きといろんなところで遭遇している。

風洞、波洞、峪の笏等に、純正な「ドミソ」は豊富に存在している。これは、純粋な音響物理学からいっても完全無欠なもので、まさに、神からの賜物なのだ。音階はピタゴラス音律でとるとしても、その一段階前の原始的な楽器（一弦琴とか、穴のない笛とか）はすべて純正な倍音を基にしている。世界中にある一弦琴では、弦の長さを二分の一のところを押さえるとオクターブ上の「ド」になり、三分の二で「ソ」となる。ごく大ざっぱにその分数関係を表すと、各音程関係は次のようになる。



純正律だからこそこのような単純で美しい分数になっているが、平均律では信じられないくらい汚い数字になる。

もちろんこの関係は弦楽器だけではない。現在でもビール瓶に唇を当てて吹くと、必ず一定の音が出る。唇をすぼめて強く吹くと、基音よりももっと高いつんざくような音が出る。これが、管楽器の自然倍音なのである。

ところで、モンゴルとその北西のトゥバ地方には、ホーメイ、またはホーメイとも呼ぶ世界一変わった民謡の唱法があるが、これは初めて CD を聴いた人にはにわかには信じがたいだろうけど、一人だけで完全な二重唱をやるのである。といっても低い地声の引き延ばしの声は一定で、その上に発生する倍音を選別して歌っているのである。

これは実に驚嘆すべき歌声なのだが、いま欧米ではひそかにホーメイがはやっており、世界コンテストまであるのだ。フランスのコーラスグループが出した「The Harmonic Choir」という CD では、ホーメイの真似事の倍音をシンセサイザーでやっているが、まやかしかもいいところである。

日本でのホーメイの第一人者は、あのテクノバンドの「ヒカシュー」のヴォーカリスト巻上公一さんで、ぜひ彼のアルバム「口の葉」を聴いてもらいたい。

ところでいつまでも一弦琴やバルブや穴なしの自然管の楽器だけでは、音楽は貧弱なままである。そこで、弦楽器で言うと、二弦琴、三弦琴と弦を増やして行くことによって表現力が増した。しかし、そのチューニングの過程で、ピタゴラス音律との衝突が起こってしまい、世界中の大半の音楽から純正な「ドミソ」の存在が希薄になってしまったのである。ギリシャ時代の音楽を聴くことはもうできないので、正確なことは言えないが、残された理論から類推しても、ハーモニー感覚はあまりなかったように思われる。

純正な「ドミソ」をヨーロッパ人は十世紀前後に再発見したようだ。もっとも一番原始的な純正律はドローンと呼ばれる通奏低音の上にアドリブを繰り返すインド音楽であり、これは完全なワンコードなので純正律そのものだが、転調という概念がないので、オクターブを二十二等分した音階のメロディとリズムが異常に発達し、アンバランスになっている。

タイは七等分平均律というのがあるらしいし、アラビアでは二十四等分音感というのもあるらしいが、私は研究していないので詳しいことはわからない。

ヨーロッパの石造りの高い天井にこだまする単旋律（グレゴリオ聖歌）は、その余韻の中に発生する協和音を再発見していった。

ヒリヤード・アンサンブル、キングズ・シンガーズ、タリス・スコラーズ等のコーラスグループが忠実に再現している透明きわまりない、時には冷徹にも思えるほど澄み切った調和の極限のハーモニーが純正律そのものなのである。まだ聴いていない人は一度耳にしてほしい。

「音の後進国日本」

1998年著

今後のスケジュール

2012年12月14日 金曜日

【純正律音楽コンサート】

会場：【ラ リール】（地下鉄丸ノ内線 茗荷谷駅 徒歩5分）

東京都文京区大塚3-21-14 （Phone : 03-3942-2830）

日時：2012年12月14日（金曜日） 開場：18時 開演：18時30分

出演：水野佐知香（ヴァイオリン）・三宅美子（ハープ）・吉原佐知子（お箏）

入場料：3,500円（会員特別価格3,000円）

ご予約：TEL03-5317-0291 FAX03-5317-0289

2013年3月16日 土曜日 予定

【純正律音楽コンサート】

会場：【角筈区民ホール】新宿区西新宿4丁目33番7号

詳細は決定しだいご連絡致します。

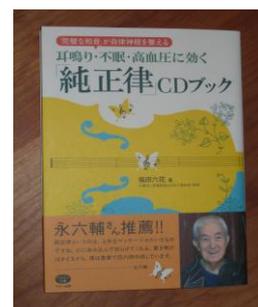
★「純正律」CDブック(マキノ出版)

新発売 1,470円(税込)

昨年の夏から、玉木宏樹が作成していた純正律ブックを、純正律音楽研究会理事の福田六花さんが引き継ぎ、ようやく発刊の運びとなりました。

永六輔さん推薦 !!

事務局で販売しております。



★ 年会費についての重要なお知らせ

会員の皆様方には、毎年年会費をお振込いただき誠にありがとうございます。年会費はご入金いただいてから一年後の月末まで有効となっておりますが、事務処理が煩雑になり、振込用紙の送付が遅れたり、重複したりしてしまいましたので、年度ごとのお振込に変えさせて頂くことになりました。ついては、今年度お支払い頂いた会員様には誠に申し訳ございませんが、8月以降は年会費を徴収せず、平成25年度分(1月～12月)から徴収致します。平成25年1月全ての会員様に年会費の郵便振替用紙を送付致しますので、よろしくお願い申し上げます。



おたより募集！

会報のご感想、ご意見、純正律音楽にまつわること等々、なんでもお寄せ下さい。たくさんのお便りを、お待ちしております。

次号の【ひびきジャーナル】にてご紹介させて頂きたいと思っております。

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東 3-2-5-102 NPO 法人 純正律音楽研究会

お電話：03-5317-0291 FAX：03-5317-0289

e-mail：puremusic0804@yahoo.co.jp

<http://just-int.com/>

<http://www.archi-music.com/tamaki/>

平成24年11月10日

発行責任者：NPO 法人 純正律音楽研究会

編集：相坂政夫